ポンペイ・チュックの旅

組原　洋

1

１９９１年2月２７日（水）、午後１２時３０発のコンチネンタル航空で沖縄を発ち、グアムを経て、同日の夜１０時過ぎ（日本時間より２時間早い）にポンペイに着いた。グアムからの飛行機はチュック（トラック）を経由するが、ここで大半の人が降り、かわっておばさんを主体とする現地のツアーが乗り込んできてほぼ満員になった。

今回も私の法人類学ゼミで勉強している赤嶺智君と一緒である。赤嶺君とは２度ベラウ（パラオ）に一緒に行っている。今回私は、ベラウ以外の太平洋の島に行ってみたいということでポンペイ（ポナペと呼ばれていた）にしたのだが、出発のちょっと前、一緒に行こうという学生はいないかと声を掛けてみたら、行くといったのは赤嶺君１人だった。ポンペイに行きたいとはずっと考えていたが、都合がつかず、やっと１週間余りまとまった時間がつくれたので、行くことに即決した。

この島については、知っていることといえば、ずっと前、今西錦司氏らが調査したことぐらいで、ガイドブックさえ見ないで出発した。

ポンペイの空港でのイミグレーションも税関もきわめて簡単に済んだ。沢山の人が待っているなかを出ていくと、レンタカーの窓口があったので、そこで借りた。１日３５ドルである（通貨は米ドル）。とりあえず土曜日まで借りることにした。空港からコロニアの街までは近く、ほんの５分ぐらいだった。しかし、街の中に入ってみて当惑した。全然ホテルらしいものが出てこないのである。大きな、ホテルかなと思われる建物でとめて降りてみたらそうではなかった。どうも、目立った看板が出ていないので、走っても分かりそうにない。レンタカーを借りるとき地図をもらったが、これにホテルのリストがのっていて、その中で一番安いヒフミ・イン（Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎ）を探していったが見付からない。結局、見付けたのは、ホテルポンペイという所だった。一泊４２ドルほどだということだった。もう遅いのでここに決めた。バンガロー式になっていて風がよく通り、冷房はなくても十分涼しかった。

ここに着くまでほとんど真っ暗だったが、ホテルの前に小さな雑貨屋があって、明かりがついていたので、水を買おうと１人でいってみた。水を下さい、というとけげんな顔をしたことから、ここの人は水は買わないのだな、と察しがついた。コーラ（１缶５０セント）とドーナツ型のパンが１０個ぐらい入ったもの（１ドル）を買った。品数はきわめて少ない。店の横に腰掛けが並べてあって数人の男が座っていた。何か飲んでいた。

2

翌２８日、目覚めるともう１１時半だったので、ホテルをかわることはあきらめた。ともかく、コロニアの町を回ってみようということで、適当に走っているうち、すぐにはずれに出てしまい、やがて道らしい道がなくなった。なおも行くと急な下り坂になり、そこを下りたところで引き返そうということになった。ところが、車がスタックしてしまい、のぼれない。やあれやれ、最初からこのざまだ。あれこれやっているうち大きななたをもったおじさんがやって来て、様子を調べ、幾つか石を敷き並べてから、車のキーを我々から借り、弾みをつけて一気にのぼってくれた。

食事はメインストリートに面したナミキという食堂でした。定食が３～４ドルである。鶏肉のほか、芋をつぶしたものに果物の汁で作ったらしいソースをかけたものがついていた。御飯はおいしい。多分カリフォルニア米だろう。

食べてから斜め向かいの観光局に行ってみた。観光地図は無料である。絵葉書のほか、本が一冊あったので買った。Ｇｅｎｅ　Ａｓｈｂｙ「Ａ　Ｇｕｉｄｅ　ｔｏ　Ｐｏｈｎ－ｐｅｉ：Ａｎ　Ｉｓｌａｎｄ　Ａｒｇｏｓｙ（Ｒｅｖｉｓｅｄ　Ｅｄｉｔｉｏｎ）」（Ｒａｉｎｙ　Ｄａｙ　Ｐｒｅｓｓ・１９８７）である。これが大変傑作で、ポンペイのことをオールラウンドに知るには最適である。実際、滞在中分からないことがあるとたえずこの本を出して読んだ。すぐ隣の郵便局では、記念の切手を何枚か買った。今取り出してみるとそのうちの１つは、現在建設中の首都の完成予定図で、右半分が立法部と司法部で、左半分が行政部である。

このあと、とにかく島を１周してみようと、時計の針回りに島めぐりを始めた。コロニアは島の北端にあるので　南にむかって海岸線を走っていく。結構家がある。まとまってはいないが、とぎれない程度に点在している。山が深いのが印象に残った。やがて、Ｐ－ａｔｓという村に出た。ここが、島の南東端近くになるが、ここから有名な遺跡Ｎａｎ Ｍａｄｏｌのある島はすぐである。しかし、我々２人ともそういうものには関心が薄い。この村では大勢の人がバレーボールをやっていた。Ｐａｔｓからさらに島の南端を進んでいくと、集落はごくわずかになっきた。島の中央に向かってのわかれ道は沢山あるので、道から山のほうに入ったところに人々は住んでいるのだろう。やがて、道は極端に悪くなってきた。石ころだらけの山道である。やっと一軒、家が出てきた。５～６名の子供たちと、夫婦らしい人が庭に出ていた。この先、道はあるのか、コロニアまで行けるのか、と英語できいてみたのだが、分かったのか、分からないのか、返事が釈然としない。地図で見ると島の周りを道が貫通しているのだが、見たところ先には山並みが連なっているようで、今日はここで引き上げようということにした。

夜８時過ぎて開いているレストランというと、ごくわずかしかない。我々はジョイホテルのレストランに行くことにした。感じでは、日系の人がやっているようで、そして、お

客にも日本人の若者がいた。まあまあまともな食事ができた。

3

翌３月１日、我々としてはこの島はもうそんなにいないでいいという気になって、それより、トラックも見てみようということに決めた。それで、空港に行って切符の変更をまずしようとしたが、コンチネンタル航空の係の人がいなかったので、先に安いところに宿替えすることにし、Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎに行った。若い女の人が出てきて、ともかく今日の分を払った。ツインで２３．８５ドルだそうである。ここが、ポンペイで最も安い宿である。

空港に戻ると、コンチネンタル航空の係員がいたので、ポンペイーグアムを、ポンペイートラックーグアムにかえてほしいと申し出ると、この切符はディスカウントチケットだから変更は不可能だ、この切符に書かれているとおり飛ぶしかない、という。ベラウではベラウーグアムをベラウーヤップーグアムにかえるのも無料で簡単に出来たことと比べ、余りに違う。そのあたりのことを言ってみたが、このおじさんはにべもない。どうも、なぜだか知らないが我々は嫌われたらしい。

ホテルポンペイからＨｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎに荷物を移してから、赤嶺君とどうしようかと考えた。こういう小さい島だとコネしかなかろう。私の手持ちのコネというのが１つあって、その人は、ミクロネシア連邦政府の外務省で働いている。そこに行ってみることにした。この人とは、沖縄のバプテスト教会のキャンプで以前知りあった。私は、クリスチャンでも何でもないが、バプテスト教会が持っているビーチで潮干狩があるというので連れていってもらったことがある。行ってみたら、たんに潮干狩をやるだけではなく、聖書の勉強等もたっぷり組んであって閉口したが、ともかく、そのとき、夜になってビーチでパーティーがあって、そこでポンペイの言葉で歌を歌った娘さんがいて知り合いになったのである。私としては、こういう用件で彼女と会うのは本意ではなかったが、やむを得ないだろう。そして、頼むにしても、路線変更は難しいのではないかと思い、ともかく予定より早く発つことだけをお願いしようということになった。赤嶺君はグアムから東京に行くそうだ。私は、グアムからヤップかサイパンにでも行って、またグアムに戻り、沖縄に帰ることにした。

ミクロネシア連邦政府の首都は、前記のとおり、目下建設中である。場所は、コロニアから時計の針とは反対方向に車で１０分か１５分行ったところにある。Ｐａｌｉｋｉｒというところである。行ってみると、沢山の建物があり、その一番奥のところが行政部のようで、大統領専用の駐車場や大統領室もあった。会おうと思えば簡単に会えそうである。

私の知り合いの名を言うとすぐに通じて、中へ通された。なかなか立派な机をもっていらっしゃって、偉い人だったのだなと分かった。考えてみれば、そうでもなければ沖縄に

来ることもできまい。私のことはもう忘れているようだったが、教会のキャンプのことを言うとすぐに思い出してくれた。デスクの横に、沖縄に行ったときの写真が沢山張られていた。早速用件を言うと、すぐにＯＫしてくれて、午後来てくれということだった。仕事の途中で忙しそうだったので、２、３質問をしてから引き上げた。

コロニアの食堂で定食を食べてから、約束の時間にちょっと間があったので、新首都に行く手前のところから橋がかかっているＳｏｋｅｈｓ島に行った。いるは、いるは、子供たちがわんさといた。海辺に添って沢山の住居が小さな島を取り巻くようにして建ち並んでいる。スラムというほどでもないが、貧しい人々の住家のようである。

約束の時間に行くと、ちょっとして、私のコネは日本人２人と奥のほうから出てきた。海外協力開発隊関係の方で、１人はここに常駐らしいが、もう１人が東京から来た偉い役人のようで、これが、実に冷たい感じの人で、かつ、私も学生と間違われたようで、「あんたたちも隊員に応募してください」などと一応語りかけてはくれたが、それ以上接触する気をこちらで失った。この２人と対応しているときの私のコネは、卑屈といってもいいほどで、痛々しかった。援助してもらうのも大変だろうなあ。

切符の件は、うまく行ったそうだ。空港に行けばやってくれる、というので、早速行ってみたら夜８時に来てくれ、とのことだった。昼間は、赤嶺君が、Ｎｅｔｔ村にカルチュラルセンターがあるというので、そこに行くことにした。昨日まわった道をちょっと行ってから右に折れて山のなかに入っていくのである。折れるところで地元の青年にきくと、ここからだというので入っていった。やがて、それらしいものに出たので車を止め、日本語で書かれた碑があったので、その写真を撮っていたら、おばさんがけわしい顔をしてやって来て、ここはカルチュラルセンターではない、といい、かつ、我々が日本人であるのを確かめると、日本人は入ってはいけないといわれた。
川に添っていくとここでも昼間からバレーボールをやっていた。子供ではない。ちゃんとしたおじさんおばさんも混じっているである。やることもないし、一番安いスポーツだからということであろうか。また、この通りに刑務所があった。

奥へ奥へといくと、行止りになり、ここに番人小屋みたいなものがあって、この奥にツインフォールがあるのだそうだ。まあせっかく来たのだからと、その二重の滝なるものを見てきた。１ドルだったか、とられた。

ホテルで休んでから８時に空港に行くと、結局９時半頃までも待たされた。明瞭に嫌がらせされている。それでも粘って、何とか、３月３日のポンペイ－グアム便にかえてもらった。この件で、赤嶺君はすっかりこの島がいやになったようだ。

スーパーで、缶詰、ジュース等を買ってから、Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎに戻って夜食しようとし始めたところでお客さんが来た。ところが、昼間はいたメイドさんが、どこにいったのかいないのである。お客さんはもうしこたま酔っ払っているようで、聞けばトラックから来たのだという。この日がちょうど金曜日なので、週末に遊びに来たものらしい。ト

ラックは禁酒になっているということで、飲みたい人はこっちに来て飲むのかと私は想像した。この人はかなりの間ロビーで待っていたが、とうとうどこかに行ってしまった。もったいない話である。泊っている客は、我々２人だけである。猫が１匹いて、我々が餌をやった。

4

翌２日は土曜日で、私は早く目が覚めたので散歩に出てみた。赤嶺君というのがなかなか神経質な人で、蚊が出ると眠れないというので、昨夜蚊取り線香を買ってきて、２巻きも並べて寝たら、朝になったら部屋中煙だらけで、それで目が覚めた。

Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎは、場所は抜群に良くて、公設市場がすぐのところにある。しかし、行ってみるとごく小規模の、これで市場といえるのかね、といったほどのもので、釣ってきたばかりの魚や、バナナがちょっとつるしてあるだけだった。そばに、ヨシエエンタープライズというかなり大きなスーパーがあるので、ここにも入ってみたが、品は豊かではない。

帰るとやがて赤嶺君も起きてきた。蚊が１匹も出なかったことが満足のようで、昨日はホテルを移りたいといっていたのだが、このままいることになった。やがてメイドさんがやって来た。何でも、この人はＮｅｔｔ村から通っているのだそうである。４時半までが勤務時間で、それが終ると家に帰るのだそうだ。その間、仕事といっても特別なことはないようで、ほとんどロビーのソファに寝そべっている。ほかにこのホテルを管理している人はいないようで、ということは、４時半以降にこのホテルに来ても、泊りようがない、ということなのである。彼女には４人姉妹に１人兄がいて、６人きょうだいだそうで、家は自作農で、キャッサバとか砂糖きびとかを作っているということだった。一見すると気がきかない娘のように見えたのだが、話してみるとなかなか愛嬌があって、学校も高校まで出たそうである。学校では、英語とポンペイ語の２本だてで教育しているそうである。

レンタカーの延長手続きを済ませてから、昼御飯はヴィレッジホテルにしようと赤嶺君が言うので、それを探していったが見付からなかった。コロニアから少しはずれたところにあるらしいのだが、何しろ看板らしいものもないので、あきらめ、空港の横にあるハーバーヴューホテルのレストランに行った。後で分かったことだが、ここは沖縄出身者が経営している。ポークカツが６．５ドルほどで、なかなか結構な食事であった。客は日本人が多く、ペコペコしたりされたりしている人が多い。仕事の話をするところなのかなと思った。売店に前記のＧｅｎｅ　Ａｓｈｂｙ氏編集の、「Ｎｅｖｅｒ　ａｎｄ　Ａｌｗａｙｓ―Ｍｉｃｒｏｎｅｓｉａｎ　Ｌｅｇｅｎｄｓ、Ｆａｂｌｅｓ　ａｎｄ　Ｆｏｌｋｌｏｒｅ」（１９８９）と、「Ｍｉｃｒｏｎｅｓｉａｎ　Ｃｕｓｔｏｍｓ　ａｎｄ　Ｂｅｌｉｅｆｓ」（１９７５）があったので買った。いずれも、コロニアにあるＣｏｍｍｕｎｉｔｙ　Ｃｏｌｌｅｇｅ　ｏｆ　Ｍｉｃｒｏｎｅｓｉａの、各地域からやって来た学生

が地元の民話や慣習等を書いたものであり、出版社も、やはり地元で唯一の出版社Ｒａｉｎｙ　Ｄａｙ　Ｐｒｅｓｓである。コミュニティカレッジには、行ってみたが、１階建ての小さな校舎が幾つも並んでいた。

そのあと、空港で、明日の出発時刻をきいた。夜だと分かる。御存じの方もいると思うが、先般コンチネンタル航空は倒産した。その後、どこかの会社に譲渡されたらしいが、今も一応コンチネンタル航空として運行している。しかし、例えば、スチュワーデスの制服はかわった。以前のは長いドレスの両横が深く切れこんでいて、まあ、言ってみれば、相撲取りの飾りまわしを前後に着たようなもので、なかなかチャーミングだったが、今は普通のスカートになっている。ともかく、そういうことで、そもそもちゃんとした時刻表がなく、いちいちきいてみないといつ飛ぶのかもよく分からないのである。

今日は、時計の針と逆方向に島を回ってみることにする。首都のＰａｌｉｋｉｒまでは道も舗装されて立派であるが、その先からは泥道になる。しかも、段々道は悪くなっていき、本格的な道路作りはこれからという感じである。集落も、ポツポツと続くのだが、反対側の海岸より明らかに少ない。生活のレベルも落ちるようで、例えば、カヌーがつけられるようにして川岸に、というより川中に住居があり、お姉さんらしいのが弟たちの見ているところで、芋か何かを切っていたが、弟たちは本当に素裸なのである。「未開」の感十分である。写真に撮りたくてお姉さんに向かって許可を求めたが、分からないようで、かつおびえてもいるようなのでやめにして、また車を動かすと、ちょっと離れたところで若い男が我々を監視するようにじっと見詰めていた。ここの人々は一見友好的であり、特に、車を走らせていると、子供たちは必ずといっていいほど手を振ってくれるが、それ以上何かたずねたりすると、とたんに引き下がってしまう。そして、いつもそれを監視している人がどこかにいる。どこでもそういう感じである。

やがて、一昨日引き上げたところに出た。我々をおぼえていてくれて、子供たちが盛んに手を振ってくれた。あとはまっすぐコロニアまで戻った。

ホテルに戻って休んでから、ジョイホテルで食事したが、行く途中大きなスーパーを見付けたので帰りに寄ってみた。品揃えが大変豊富で、こういうスーパーもあったのかとびっくりした。ベラウのスーパー並みである。ココナツオイルで作った石鹸を買った。

5

３月３日、この日は日曜日で、かつ、夜には出発である。Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎのメイドさんは今日はお休みで、しかも、他に誰も客がいないので、自宅を使っているようなものである。実際、ホテル代も払いようがないので、払わなかった。

表の通りを見ながら、ロビーのソファで寝ていると、昼前、またあのトラックの人が来た。ちょっと話した。どうも公務員のようで、アメリカのワシントン州に留学していたそうで、しかし、それにしては英語はあまりうまくない。ポンペイは３度目だそうで、目的

は釣りだということだった。日曜日で、かつ、雨がひどく、退屈してやってきたらしい。雨は実際よく降る。

我々もほかに行くところがないので、またジョイホテルで昼飯を食べた。食べ終ってホテルのロビーを見ると、テレビがうつっていて、何と日本映画なのである。あれっ、と思ってそれをみていた日本人のおじさんにきいてみると、有線放送のテレビなのだそうで、ハワイからのものが多いということだった。

おじさんは我々に、まず真っ先に、「ここの人ですか」ときいた。旅行者と分かると途端に多弁になって、結局夕方まで話した。この方は大阪からビジネスでやって来ている人であった。仕事は総合卸売だそうで、つまり、ミニ商社だと思えばいい。ここは市場が小さいので、大きな商社は引き合わないのだそうで、島づたいに注文を取りながら回っている企業が１７ほど入っているということだった。そういうわけで何度もミクロネシアの島々を訪れており、大体１つの場所に１週間ぐらいいるらしいが、例えば、同じミクロネシア連邦でも地域により生活のレベルは違っていて、インスタントラーメンにしても、コスラエだとサッポロラーメンがあるのに、トラックは韓国製のものしかない、といったようなもので、いちばん人口が多いのに、最も貧しいのがトラック、ポンペイはまあまあとのことである。アメリカの援助も等分になってはいないらしい。

我々がベラウでの日本人のことを話すと、このおじさんは、もともとそういう性格でもあるのだろうが、我々が旅行者だと分かったせいか、「日本人はいやらしいねえ」といって、実にあけすけに、ここの日本人、ないし日系人の現状について話してくれた。こうして、ジョイホテルも、ハーバーヴューも、ヨシエエンタープライズも、品揃えの豊富なスーパーも日系のファミリーがやっていることが分かったのだが、ポンペイでは、日本人会という統一したものはなく、私的な集まりしかなく、分裂状態のようである。代が下がるにしたがって段々とポンペイの血も入ってきて、誰それは何分の１日本人の血だというようなことを細かく教えてくれた。そうなると国籍の問題が起こってきて、日本の国籍もここの国籍も両方欲しいということになるらしいのだが、それが難しくて、例えば、このジョイホテルの経営者の誰それが日本国籍のほかに、ここの国籍も得ようとしたが駄目だった、というような話をきいた。ここには、教会や裁判所での結婚証明はあるが、戸籍はないそうだ。今日、我々と同じ便で、何分の１だか日本人の血が入った娘が日本で出産するために出発するのだそうだが、それも、日本なら安心ということのほか、国籍の問題が色々あるせいらしい。なお、ここの人は医療費はすべてただだそうである。ここにも病院はあるが、重病だと、以前はアメリカに送っていたのを今はフィリピンに送るのだそうで、どうもフィリピンなんかに行くことになったら大変だみたいなのもあるらしい。

そのあと、Ｈｉｆｕｍｉ　Ｉｎｎでゆっくり休んでから出発した。このＨｉｆｕｍｉというのも、日本語の「ひい、ふう、みい」のことではないかと思うのだが、主はどこに行っちゃったのだろうか。

まずハーバーヴューで夕食を済ませた。明らかに商売女と思われるのが２～３名いた。

6

午後８時半に空港でチェックインし、レンタカーも返した。空港のお土産屋に、Ｄａｖｉｄ Ｓｔａｎｌｅｙ「Ｍｉｃｒｏｎｅｓｉａ Ｈａｎｄｂｏｏｋ」（Ｍｏｏｎ Ｐｕｂｌｉｃａｔｉｏｎｓ Ｉｎｃ． Ｓｅｃｏｎｄ Ｅｄｉｔｉｏｎ １９８９）があったので買って読み始めたのだが、これが素晴らしく面白い。特に、トラック諸島は面白そうに思われた。昼間きいたおじさんの話でも興味をもったので、よし、途中で降りようと決意した。切符は、トラックでグアムまでのを買えばいいわけだ。ただ、そのあといつトラックからグアムに発てるのか全く見当がつかなかったので、赤嶺君に東京についてから沖縄に電話しておいてもらうことにした。

飛行機は夜１１時半頃飛びたち、トラックの時間はポンペイより１時間遅いので同じ時刻に着いた。イミグレーションに真っ先に行って、手続きを始めたら、途中で降りたのがたちまち不審に思われたようで、女の係官の顔がけわしくなった。なぜか、ちょうどそのとき私はめまいがしはじめ、これはいかんな、と思っているうちに気絶したらしい。気がつくと、私は２人の係官に両腕を抱えられて奥の別室に連れていかれるところだった。やあれ、やれ。審査官室のようで、椅子に座らされた。男の係官は気の毒そうに、気分が悪そうなのでここに連れてきただけだからと、こちらが気の毒になるような顔で何度も言った。私は、気がついてからは気分が良くなり、落ち着いて事情を説明した。段々向こうも分かってきたようだが、要するに出国チケットが無いわけだ。よくよく考えて、問題は何もないつもりだったのだが、ぬかった。切符を買えるだけの金はもっていることを証明すればいいのだろうと考えて、１００ドル札を何枚か取り出して、今切符は買うからというと、あちらも晴れやかな顔になって、では行こう、と。男の係官がコンチネンタルのカウンターに連れていってくれた。そうしたらここのコンチネンタルというのは同じコンチネンタルなのかと思われるほど大違いで、新たに切符を買う必要はない、というのである。ただ予約が入っていないので入れる必要がある。予約を頼むと、奥から流暢な日本語をしゃべる娘さんが出てきて、今は忙しいからちょっと待って、と。実に親切な感じなのだ。ついでに言えばとても美しくもある。ボーッとしてしまった。

待っている間、男の係官に空港にトラックと書いてなかったことを言うと、今はＣｈｕｕｋというのが正式な名前になったのだと説明としてくれた。トラックという文字が見当たらないので、もしや別のところに降りたのではないかという気もしていたのである。

予約の方はもう遅いので明日に、ということになり、荷物検査を済ませ、パスポートにハンコも押してもらい（もっとも、同じミクロネシア連邦内なのになぜハンコが要るのかよく分からない）、そして、私が泊まるつもりだったホテルはもう満員になったというので、男の係官が別のホテルに連れていってくれるということになった。かくして、入国審

査官殿と一緒に車に乗った。いくつかのホテルを回ったが満員だった。係官はあちこち電話をかけていたが、やっと見付かったようだ。空港のあるのはモエン島（日本統治時代は春島と呼ばれていた。また、現地ではＭｏｅｎではなくＷｅｎｏと言っている）だが、ちょっと走って感じたのは民家が密集していることだ。小さい島にわんさと住んでいるようだ。着くと、係官は、明日の朝迎えに来るからといって行ってしまった。連れてこられたのは、キチンつきの、どうもアパートメント方式のホテルの２階のようである。ベッドのクッションは素晴らしかった。しかし、断水している。

7

４日の朝、８時に係官が迎えに来るということだったので、そのちょっと前に下に降りて、管理室に行った。オーナーがいた。税込みで４６ドルだそうだが、施設のわりに安い気がした。朝起きて、窓からみていたら、泊まっているのは欧米人の家族たちのようで、皆上等な車でやって来ていた。オーナーと話しているうち、どうもこの人は日本人じゃないのかという気がしたので、きいてみると、二世だということだった。ＳＵＫＡというのが姓だというので、多分、須賀だろう。私が漢字で書くと、それはどういう意味か、ときくので、須＝ｍｕｓｔ、賀＝ｃｅｌｅｂｒａｔｅと書くと、Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｃｅｌ－ｅｂｒａｔｅ！　といって大笑いしだした。こういう調子だから、親の出身県すら知らない。このあたりから急にうちとけてきて、コーヒーを出してくれた。奥さんも日系のようだが、黙っているところを見ると、やはり日本語は全然だめなのだろう。

島をみるのにどれくらいの時間が必要だろうかときいてみると、２時間もあれば十分だという。そんなに小さいのかと、びっくりした。そして、飛行機は、今日も、明日もあるのだそうだ。今日の便は午後だというので、もし予約が取れたらこれにしようと決めた。というのは、明日の便だと、グアムでの乗り換え時間が１時間ほどしかなく、そして、これまでの経験だと、まず遅れて乗り継げないだろうと思われたからである。

ＳＵＫＡさんのところは、１階は、雑貨屋になっている。見せてもらった。スペースは十分あるのだが、品が少なく貧弱に見える。そのうちＳＵＫＡさんの友達がやって来た。やはり店を持っているようだ。そして、日本では中古車なんかとても安いといった話をしていたら、是非カタログを送ってくれないかとまじめな顔で言い、希望品目を私のメモ帳に書き連ねた。ｃｌｏｔｈｉｎｇ、ｃａｎｎｅｄ　ｇｏｏｄｓ、ｕｓｅｄ　ｃａｒｓ、ｔｅｅｎ’ｓ　ｊｅａｎｓ（ｐａｎｔｓ）、ｃｏｌｏｒ　Ｔ－ｓｈｉｒｔｓ，ｌｏｎｇ－ｓｌｅｅｖｅｓ　ｓｈｉｒｔｓ、　ｕｓｅｄ　ｃｌｏｔｈｉｎｇｓ　ｆｏｒ　ｂｉｇ　ｓｉｚｅ、以上である。

やがて、入国審査官氏がやって来た。ちょうどウチナータイムぐらいの感じである。空港までの途中、できれば今日発ちたい、という希望をのべたら、今日は非番だから自分が車で案内してあげようという。ありがたくお願いすることにした。案内してもらっている

ときに、レンタカー代程度と思われる額をお礼として差し上げた。

コンチネンタルの手続きは、昨日の娘さんがやってくれた。東京の専門学校でコンピューターを習ったそうで、東京は高いでしょう、というと、国費留学で行ったのだそうだ。両親とも高知だそうだが、そうすると酒が飲めなくてつらいでしょう、というとしきりにうなずいていた。なんとか写真を撮らせてもらいたかったのだが、言いそびれ、結局名前さえきけなかった。新しく作ってもらった切符を手にして、しばらくは信じられない気分だった。実際、赤嶺君が、沖縄に帰ってから、使わなかったグアム－沖縄間の払い戻しを請求しに行ったがだめだった。

入国審査官氏は、まず朝ごはんにしようといって、レストランに連れて行ってくれた。聞けば、これが有名なススムレストランなのだそうだ。相沢進氏のことは、赤嶺君から借りたガイドブックにも書かれている。それによれば、この人は、モエン島から３０キロ南西にあるトール島の酋長で、元はプロ野球の選手だったが、２８歳でトラックに帰化したのだという。ポンペイで大阪のビジネスマン氏からきいたところによると、ここも日本人同士でごちゃごちゃやっているそうで、そのなかで相沢氏は落ち目なのだということであった。実際、レストランは古色蒼然としていて、客はほとんど現地の人のようである。相沢氏夫妻もこの店で知り合いと食事していたが、挨拶するのは遠慮した。相沢氏はやせていて、小柄な感じに見えた。このとき話していて、入国審査官氏がオレゴン州の大学に米留したのだということを知った。しかし、３年間いて、結局ドロップアウトして戻ってきたのだそうだ。

それからドライブを始めた。最初、南の端にあるコンチネンタルホテルまで行って、それから戻ってきて、途中、日本人でここに住んで１１年になるという人がやっているお土産屋に立ち寄ってから北側の海岸に出て、東端の山になっているところをのぼっていき、旧海軍通信部跡まで行って、あと空港に戻ってきた。これで２時間ぐらいのものである。

途中から雨がひどくなったせいもあるが、入国審査官氏と会話する方に段々熱中して、まず宗教のことから話が始まって、彼はプロテスタントだそうだが、その他に、バプテスト、カトリック等々全部で６つあるのだそうで、通るたびに、ここは何々派と教えてくれた。どれか特別に強い宗派があるというのではないようだ。高校は３つあるそうだが、これも宗派の別と密接に関連しているということである。道にパラソルみたいな派手な色の傘をさした人があちこち立っている。何しているの、ときいてみると、雨が降ると学校は休みになるからというのである。冗談かと思ったら本当らしい。あとで、空港についてから空港の職員にも同じ質問をしてみたらうなずいていた。また、道端で男と女がじゃれあっているのも見かけた。愉快な島であるらしい、私みたいな人間には。

入国審査官氏の出身地をきいたらサタワル島の出身であることが分かった。サタワル島はモエン島とヤップ島の中間ぐらいのところにある離島で、州としてはヤップ州に入る。この島は、以前から人類学者が注目してきた島で、日本人では、戦前土方久功氏がこの島

を綿密に調査しており、「ミクロネシア＝サテワヌ島民族誌」（未来社・１９８４）等の作品があるが、最近でも、須藤健一氏や、石森秀三氏らがこの島を調査していて、須藤氏には「母系社会の構造」（紀伊國屋書店・１９８９）、石森氏には「危機のコスモロジー―ミクロネシアの神々と人間―」（福武書店・１９８５）という作品がある。入国審査官氏も「たしか、ケンイチという人が来ていたそうだが」といっていたので、多分須藤氏のことだろう。この島は定期船がないので、行くだけでも大変である。私がサタワル島のことを知っていると分かると、入国審査官氏はとても興奮して、今すぐには出来ないが、来年ぐらいなら島の人と連絡して行けるようにしてあげようといい、彼のほうから私の住所をきいてきた。そして、お土産にＣｈｕｕｋという文字のプリントされたＴシャツを買ってくれた。観光土産店だと、トラックとプリントしたのばかりで、チュックと書いたのはなかったが、スーパーには売っていた。入国審査官氏も、いずれはサタワル島に戻りたいということだった。

8

入国審査官氏と正午過ぎに空港で別れて、チェックインした。今日も、飛行機は３０分ぐらい遅れた。

４時頃グアムに着いた。イミグレーションで引っかかって、相当待たされた。何でも、私のパスポートに押されたアメリカのヴィザは無効だ、というのだが意味が分からない。しかし、今はそもそもヴィザなしでも入れるので、１か月の許可をもらって入国した。

空港から歩いて近くのホテルに向かっていたら、うしろからタクシーが来て誘ったので乗ることにした。ＨＡＦＡ　ＡＤＡＩ　ＨＯＴＥＬ　と言ったのだが、着いたのは同名のモーテルで、空港のすぐそばだった。明らかに韓国系のモーテルで、タクシーの運転手も韓国人のおばさんのようで、自分の子供を後ろに乗せていた。モーテルは１泊４０ドルである。

この日は「グアム発見の日」だそうで、祭日で、店はたいてい閉まっている。大きな通りの向かい側にマクドナルドがあるが、横断歩道が全然ないので、向こうには渡らず（というより、渡れそうにないので）、モーテル側にあったスーパーで夕食と明日の朝食を、合わせて１１ドルほど買ってきた。このスーパーも韓国系だった。ほとんど歩行者もおらず怖い感じなので、外には出ないでモーテルにいることにした。窓から車を見ていると、大きな星条旗を立てた車が走っていった。ちょうど、「多国籍軍」がイラクに勝ったばかりで、興奮しているのだろう。さあ、それと関係があるのかないのか、スーパーに買い物にいったときも、２度ほど白人から、「ジャパニーズ、コンニチワ」と声を掛けられた。

夜はテレビで、英語の字幕付きの日本のテレビドラマを見た。ハワイのＫＨＡＩというテレビだそうだが、やがて韓国語の番組になった。韓国語での、日本語講座もあった。

３月５日、８時半頃目が覚めた。今日は予定では、グアム大学に行くことにしていたの

だが、くたびれてしまった。暑いところをうろうろしていたらまた気絶しかねない。レンタカーを借りて走らせる元気も出ない。タクシーでいくか、と考えながらモーテルをチェックアウトした。

しかし、空港まで歩いたら、もうそれだけで体力を消耗してしまった。それで、午前中は空港のレストランで地元の新聞を読んでいた。

午後になって、荷物検査が始まるのを待っていたら、日本人のおじさんが「現地人」を連れてやはり待っていて、聞けば、ベラウから来て東京に行くのだそうだ。このおじさんは１５年間ぐらい、ベラウのほか、ジョンストン島やコスラエで仕事をしてきたそうで、ベラウにもココナツの加工工場をもっていたのだそうだが、つぶした（つぶれた？）のだそうである。私の知人を何名かあげてみたら、皆、彼とは仲が悪いようなので、黙って話を聞くだけにした。彼は、現地人はやる気がないからだめだといい、昔の日本の時代がよかったのだという。すごいこというなあ。隣に座っている「現地人」は日本語が分かるのだろうか。そして、教育には２代どころか３代かかる、と。この点は、同感である。この２人づれは４時０５分発の全日空で先に行ってしまった。

私はそのあと沖縄に向かって発った。夜８時頃沖縄が見え始めたが、どこまでも輝いている明かりにぼう然とした。もしや別を所に着いたのでは、と一瞬思ったほどである。実際、グアムだと思ったらサイパンだったという経験がある。沖縄はこんなに大きなところだったのかとあらためて感じ入った次第である。

（１９９１・５・１３脱稿）